

第二言語としての日本語のアスペクト習得研究概観

崔, 亜珍
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494659>

出版情報 : 比較社会文化研究. 22, pp.101-109, 2007-09-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン :
権利関係 :

第二言語としての日本語のアスペクト習得研究概観

サイ
崔
ア
亜
チ
珍

1. はじめに
2. 日本語のアスペクトの形式と特徴
 - 2.1 日本語のテンス・アスペクト形式
 - 2.2 日本語学におけるアスペクトの研究
 - 2.2.1 語彙的アスペクトの研究
 - 2.2.2 文法的アスペクトの研究
3. Vendler の動詞分類とアスペクト仮説
 - 3.1 Vendler の動詞分類
 - 3.2 アスペクト仮説の定義
4. 成人日本語学習者によるアスペクトの習得研究
 - 4.1 研究のアプローチ
 - 4.1.1 語彙的アスペクトの観点からの研究
 - 4.1.2 文法的アスペクトの観点からの研究
 - 4.2 現象の説明
 - 4.3 研究方法とデータの種類
5. 成人日本語学習者によるアスペクトの習得研究の考察と今後の研究の方向性

1. はじめに

時間は言語学上の重要な概念として、世界の諸言語にさまざまな形で存在している。そのため、「時間」に関わる文法範疇、すなわちアスペクトの研究がすでに数多くなされている (Comrie 1976, Vendler 1967, 奥田1977, 金田一1950, 工藤1995, 高橋1985, 寺村1984, 町田1989など)。アスペクトの習得においても、様々な言語の第一言語 (以下L1)、第二言語 (以下L2) 及び幼児、成人の習得研究が行われている (Andersen & Shirai 1994, Brown 1973, Shirai 1993, Shirai & Andersen 1995など)。

本稿では、成人日本語学習者を対象にこれまで行われてきたアスペクトの習得研究を概観する。まず、理論的な前提となるテンスとアスペクトの概念について概略した後、今まで行われてきた成人日本語学習者のアスペクトの習得研究をアプローチ、研究方法、データの種類などの面から概観していく。そして最後に、これらの研究について考察し、日本語のアスペクト習得研究の今後の研究の方向性を示す。

2. 日本語のアスペクトの形式と特徴

2.1 日本語のテンス・アスペクト形式

「アスペクト (相)」は「テンス (時制)」と共に時を表す文法現象として、言語学において重要な研究対象となっている。「テンス」とは、「発話の場面との関係において、場面の時間を位置づける」手段であり (コムリー1988: 10)、絶対テンスと相対テンスの2つに下位分類される。一般にいうテンスとは絶対テンスを指しており、発話時点は常に「現在」に置かれ、現在より前の時点は「過去」、現在より後の時点は「未来」となる。また、相対テンスは、時間軸上のある出来事を参照時点とし、それより前の時点は「過去」、後の時点は「未来」となる。日本語では、過去は「タ」で表され、現在と未来は「ル」で表される。

これに対して、「アスペクト」とは「基本的に、完成相と継続相の対立によって示される、〈出来事の時間的展開性 (内的時間) の把握の仕方の相違〉を表す文法的カテゴリー」である (工藤1995: 8)。完成相は初めから終わりまでのまるごとの姿で表すもので、日本語の「ル」「タ」がこれに相当し、継続相は動作や変化の持続過程の中にある姿

を表すもので、日本語の「テイル」「テイタ」がこれに相当する（高橋2003：66）。

例えば、「子供たちは公園で遊んでいる」と「子供たちは公園で遊んでいた」における「テイル」と「テイタ」の対立はテンスの対立であるが、「子供たちは公園で遊んだ」と「子供たちは公園で遊んでいた」における「タ」と「テイタ」の対立はアスペクトの対立である。

テンスとアスペクトは、お互いに緊密な関係性を持っている。例えば、日本語で「花子は昨日久しぶりに友達に会って、映画を見た」と言った場合と「その映画はもう見たよ」と言った場合、前者の「見た」はただ過去の出来事の記述となっており、テンスの表現であるが、後者は「映画を見る」という動作が終わったが、その効力が今まで続き、アスペクト表現となる。このように日本語の「タ」はテンスのマーカであると同時に、アスペクトのマーカでもある。

2.2 日本語学におけるアスペクトの研究

これまでの日本語を対象とするアスペクトの研究は主に「語彙的アスペクトの研究」と「文法的アスペクトの研究」の二つのレベルから行われてきた。語彙的アスペクトは「状況アスペクト」(situation aspect)、あるいは「内在アスペクト」(inherent aspect)とも呼ばれ、動詞自体が持っている意味素性のことであり、文法的アスペクトとは主に「テイル」などの文法形式の用法を明らかにするものである。

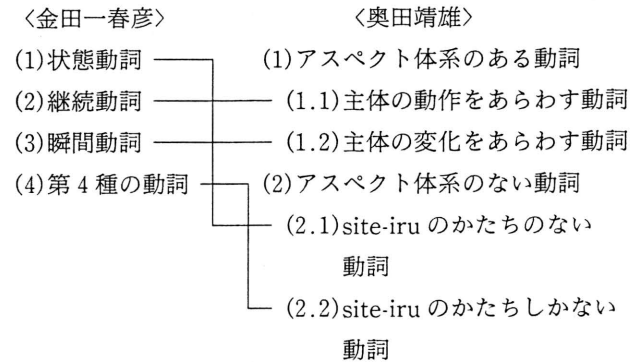
2.2.1 語彙的アスペクトの研究

動詞の持つ意味がアスペクトにどのように影響を与えるかを研究したものは日本語では金田一(1950)、奥田(1977)、工藤(1995)などが挙げられる。

まず、語彙的アスペクトの研究は日本語では、金田一(1950)による動詞の分類から始まる。金田一の『国語動

詞の一分類』では、表1のように動詞の表す時間性に注目し、日本語の動詞を「状態動詞」、「継続動詞」、「瞬間動詞」、「第四種の動詞」の四種類に分類している。

奥田(1977)は通説となっていた金田一(1950)の動詞の4分類に対して批判を加え、動詞の時間性より、他動性に注目し(つまり、「主体の動作」か「主体の変化」か)、新たな分類を提出した。両者の研究について、工藤(1995)では次のような対応関係が提示されている。



(工藤1995：9)

さらに、工藤(1995)は奥田の分類を引き継ぎ、〈動作〉か〈変化〉かという観点と、〈主体〉か〈客体〉かという観点を組み合わせ、日本語の動詞を大きく「外的運動動詞」(開ける、切る、食べるなど)、「内的状態動詞」(思う、考える、心配するなど)、「静態動詞」(ある、異なる、優れるなど)の三つに分類しており、それぞれについてさらに下位分類をしている。

2.2.2 文法的アスペクトの研究

日本語学では「テイル」が表す意味は主として以下の5つに分けられている(吉川1976, 寺村1984, 工藤1995など)。

- (1) 基本的な意味
 - a. 「動作の持続」(例：子供が泣いている。)
 - b. 「結果の状態」(例：魚が死んでいる。)
- 派生的な意味
 - c. パーフェクト(経験・回顧)
(例：その本なら、先週から使っている。)
 - d. 反復(習慣・くりかえし)
(例：彼は最近よくテレビを見ている。)
 - e. 単なる状態
(例：この道が曲がっている。)

「動作の持続」とは動作や現象が継続していることを表す。つまり、その動作・現象が始まって、終わらずに今存在していることを表し、「結果の状態」とは、「動作や現象が既に実現した、つまり終わってしまったが、その結果(痕跡)が物理的にあるいは心理的に、現在存在する」という

表1 金田一による日本語動詞の分類

動詞の種類	時間性	「～ている」が表す意味	例
状態動詞	時間を超越	—	「ある」 「できる」
継続動詞	ある時間内続いて行われる動作・作用を表す	動作進行中	「読む」 「書く」
瞬間動詞	瞬間に終わってしまう動作・作用を表す	動作・作用が終わってその結果が残存している	「死ぬ」 「電気が点く」
第四種の動詞	時間を超越	状態	「聳えている」 「優れている」

ことを表す(寺村1984:127)。「パーフェクト」とは、ある出来事が終わったが、その効力はまだ残っていることを表し、「出来事がすでに実現した」という点で「結果の状態」と似ているが、「結果の状態」に比べ「運動性」があるため、工藤(1995)では「パーフェクト」を「動作パーフェクト」、「結果の状態」を「状態パーフェクト」として扱っている。「パーフェクト」の他に、「経験」(吉川1976)、「回顧」(寺村1984)などの名称も用いられているが、本稿では、工藤(1995)に従い、「パーフェクト」と呼ぶ。「反復」とは同じ動作・作用がある一定期間に繰り返して起こることを表し、「くりかえし」(吉川1976)、「習慣」(寺村1984)とも呼ばれるが、本稿では工藤(1995)にならい、「反復」と呼ぶことにする。「単なる状態」とは、「この道が曲がっている」のように、その状態を引き起こした動作・作用の仮定が問題にならないものである(吉川1976)。

3. Vendlerの動詞分類とアスペクト仮説

日本語学におけるアスペクトの研究を見てきたが、これらの日本語のアスペクトはいかに習得されるのであろうか。これまでの成人日本語学習者のアスペクトの習得研究を概観する前に、Vendler(1967)による動詞の4分類とアスペクト仮説の定義を見ることが重要である。

3.1 Vendlerの動詞分類

Vendler(1967)では英語の動詞を次の4種類に分類しているⁱ⁾。

- (2) a. State (状態動詞): 動きのない状態を示すもの (love, contain, know)。
- b. Activity (活動動詞): 動的で持続的なもの (ran, walk, play)。
- c. Accomplishment (達成動詞): 動的で持続性があるが、決まった終結点を有するもの (make a chair, walk to school)。
- d. Achievement (到達動詞): 持続的でなく、動的で終結点があるもの (die, drop)。

この4種類の動詞の特徴を図式化したものが図1である。実線は静的な状態、波線は動的な状態、Xは終結点を示す。

図1 語彙的アスペクト(白井1998:73)

状態	—————	love, contain, know
活動	~~~~~	ran, walk, play
達成	~~~~~X	walk to school
到達	X	die, drop

Vendlerの「状態動詞」は概ね金田一(1950)の「状態動詞」、「活動動詞」は「継続動詞」、「到達動詞」は「瞬間動詞」にそれぞれ対応している。対応していないのは、Vendlerの「達成動詞」と金田一の「第四種の動詞」である。後者は日本語特有のものであり、英語では通常形容詞に当たるⁱⁱ⁾。また、Vendlerの「達成動詞」は動的で持続性があるという点では「活動動詞」と同じだが、それ以上その動作を続けられない到達点があるという点では「到達動詞」と同じ性質を持つという点で特徴的である。例えば、単に「walk」と言えば活動動詞になるが、「~to school」を付けて「walk to school」と言うと達成動詞になる。金田一の動詞分類にはこのような動詞句は含まれていないため、これに相当するものはない。

この4つの動詞は「動的性(静的か動的か)」(dynamic)、「有界性(終結点があるかどうか)」(telic)、「瞬間性(持続的か瞬間的か)」(punctual)という3つの意味素性によって表2のように表すことができる。

表2 動詞の意味素性(Andersen & Shirai 1994:134)ⁱⁱⁱ⁾

	動的性 (dynamic)	有界性 (telic)	瞬間性 (punctual)
状態	—	—	—
活動	+	—	—
達成	+	+	—
到達	+	+	+

例えば、「状態動詞」は「机の上に本がある」のように、誰かがその本に手を触れないかぎり本が勝手に動くことはなく、しかも理屈上は永久にそこに存在することが可能であるため、動的性はもちろん、有界性も瞬間性も「—」となる。一方、「到達動詞」の場合には、「電気がつく」のように瞬間的な動きを表し、電気がついた瞬間という到達点があるため、3つの要素が全て「+」となる。また、「活動動詞」と「達成動詞」は共に継続的な動作を表すため、動的性が「+」、瞬間性が「—」となるが、到達点のない活動動詞は有界性が「—」、到達点のある達成動詞は有界性が「+」となる。

3.2 アスペクト仮説の定義

アスペクト仮説とは、動詞の語彙的アスペクトがテンス・アスペクト形式の習得にどのように影響するかを予測したものであり(Anderson & Shirai 1994, Shirai 1993, Shirai & Andersen 1995など)、幼児のL1習得研究(例えばBrown 1973など)から始まる。

Brown(1973)は、英語を母語とする3人の幼児の習得過程を縦断的に観察し、母語習得の初期段階においては「過

去／完了」を表すマーカーは瞬間的出来事を表す動詞 (eg. fall, drop, slip など) に限定して使用され、その後、徐々にそれ以外の動詞 (eg. see, watch, know など) にも拡張していくことを明らかにした。

Shirai (1993)、Shirai & Andersen (1995) は Brown の研究をさらに発展させ、幼児によるテンス・アスペクトの習得順序と動詞の関係について調べた。その結果、以下の3点が明らかになった。

- (3) a. 幼児は「過去／完了」を表すマーカーを最初に到達動詞や達成動詞と結びつけ、その後活動動詞、状態動詞の順でその適用範囲を広げていく。
- b. 進行相を持つ言語では「動作の進行」を表すマーカーは最初に活動動詞と結び付けられ、その後、到達動詞や達成動詞へと適用範囲が広がっていく。
- c. 「動作の進行」を表すマーカーは状態動詞に過剰適用されることはない。

(Shirai 1993 : 188^v)

これを「アスペクト仮説」と言うが、このような語彙的アスペクトの影響は、子供の第一言語習得のみならず、大人の第二言語習得においても観察されるという。例えば、Anderson & Shirai (1994) では、それ以前に行われた成人の第二言語としてのアスペクトの習得研究をまとめているが、それによると、母語や学習環境の異なる学習者が英語、スペイン語、フランス語を第二言語として学習する際、アスペクト仮説に従うことが確認された。つまり、学習者は完了相を表すマーカー(日本語では「タ」)の使用を到達・達成動詞から活動動詞、状態動詞へと広げ、他方、進行相を表すマーカー(日本語では「テイル」)は活動動詞から達成・到達動詞へと使用を広げていくということである。

4. 成人日本語学習者によるアスペクトの習得研究

日本語アスペクトの習得研究の今後の方向性を示すために、これまでの成人日本語学習者のアスペクトの習得研究を「研究のアプローチ」「現象の説明に用いられる理論」「研究の方法とデータの種類」の三つの観点からまとめる。

4.1 研究のアプローチ

日本語アスペクトの習得研究も日本語学上の研究と同様に、語彙的アスペクトの観点からの研究と、文法的アスペクトの観点からの研究に大別することができる。前者は動詞の持つ語彙的アスペクトがアスペクトの習得にどのよう

な影響を与えるかを調査した研究であり、後者はアスペクトの意味・用法を細かく分類し、どの用法の習得がより容易なのかを調査した研究である。

4.1.1 語彙的アスペクトの観点からの研究

語彙的アスペクトの観点から行われた成人日本語学習者のアスペクトの習得研究は Shirai & Kurono (1998)、Shibata (1999)、三村 (1999)、小山 (2004) などがあり、これらの研究はいずれもアスペクト仮説を検証した研究である。

「アスペクト仮説」を検証した研究は主にインド・ヨーロッパ語族の言語だけを用いて行われてきたが、Shirai & Kurono (1998) では、L2 としての日本語におけるテンス・アスペクトの習得研究の中で初めてアスペクト仮説を検証した。彼らの研究は2つの実験を通してなされている。実験1では中国語を母語とする3名の日本語学習者に対して、会話資料を用いて、アスペクトマーカーと語彙的アスペクトの関係を考察した。その結果、3名の学習者は到達動詞と過去のマーカー「タ」の結びつき、及び活動動詞と進行のマーカー「ティー」の結びつきにおいて、日本語母語話者より強い相関を示した。実験2では、中国語、ベンガル語など様々な言語を母語とする17名の日本語学習者を対象に、文法性判断テストを用い、学習者のアスペクトマーカーに対する知識の発達過程を縦断的に検討した。その結果、17名の学習者は活動動詞より到達動詞における進行のマーカー「ティー」を正しくは判断しにくいということが得られている。Shirai & Kurono (1998) の研究結果は「アスペクト仮説」がインド・ヨーロッパ語族以外の言語でも検証できたことを示し、第二言語習得における「アスペクト仮説」の普遍性が示唆されている。

また、Shibata (1999) では、英語を母語とする日本語学習者、日本語母語話者各4名に物語絵を用いてストーリーテリングを実施した。その結果、日本語母語話者4名の「テイル」の合計は、異なり数 (type count) で活動動詞より到達動詞の方が多いが、のべ数では逆の結果となっている。これに対して、4名の学習者の使用した「テイル」も母語話者と同じく、異なり数では活動動詞より到達動詞の方が多く用いられていることが指摘されている。

さらに、小山 (2004) では中国語・韓国語・その他を母語とする3つのグループの学習者を対象に動詞とマーカーの結びつきについて調査しているが、結果はやはりアスペクト仮説を支持するもので、学習者の母語や日本語のレベルに関係なく、「テイル」は活動動詞と、「タ」は到達動詞と結びつきやすいという結果を得ている。

これらの研究とはやや視点を変え、「パーフェクト」の用

法について調査したのは三村(1999)である。三村(1999)では、「未来パーフェクト」と「現在パーフェクト」の文脈における動詞とマーカーの結びつきを調査しているが、その結果、いずれの文脈においても到達動詞より活動動詞の方が「テイル」の選択率が高く、到達動詞は「タ」との結びつきが強いという「Aspect仮説」を支持した結果が得られている。

これらの研究はいずれも「Aspect仮説」を支持した研究であり、被験者の母語が異なることや、調査項目が「テイル」の基本的な用法(「動作の持続」と「結果の状態」Shirai & Kurono 1998, 小山2004など)から派生的な用法(「パーフェクト」三村1999)までということから、「Aspect仮説」はかなりの普遍性があるとは言えないであろうか。

4.1.2 文法的Aspectの観点からの研究

他方、文法的Aspectの観点から行われた研究には、黒野(1995)、許(1997, 2000, 2002, 2005)、小山(2004)、菅谷(2003, 2004)などがあるが、そのほとんどが「テイル」の習得に焦点を当て、各用法の習得難易度を調査している。

例えば黒野(1995)では、「テイル」の中心的用法とされる「動作の持続」と「結果の状態」の2つの用法に焦点を当て、学習者(母語は様々)がどのような順序でこの2つの用法を習得しているのかを調査している。その結果、(a)学習者にとって「結果の状態」の用法は「動作の持続」の用法より習得が困難であることと、(b)「結果の状態」を習得する前段階として「テイル」の代わりに「タ」を使用する時期があることが明らかになった。

また、菅谷(2003)では、テルグ語母語話者(母語に進行形あり)とロシア語母語話者(母語に進行形なし)を対象に、「動作の持続」と「結果の状態」の使用状況を調査している。その結果、テルグ語話者は、「動作の持続」の方が「結果の状態」より正用率が高く、出現時期も早かったのに対して、ロシア語話者は両用法の使用が共に多く、正用率も高いことがわかった。その理由として、菅谷は(a)母語の影響、つまりロシア語には進行形がないため、学習者は2つの用法を同時に習得している可能性と、(b)習得環境の影響、つまり被験者は調査開始前に自然習得をしていたため、2つの用法に同時に接触していた可能性を指摘している。前者については、小山(2004)にも「動作の持続→結果の状態」という習得順序は学習者の母語に関係なく共通しているが、「結果の状態」については、中国語話者は韓国語話者や他言語話者に比べ習得に苦労する(すなわち、学習者の母語は習得の速度に影響を与える)という指摘があり、菅谷の研究結果と合わせて考えると非常に興味

深い。

これらの研究に対して、「テイル・テイタ」の用法を細かく「動作の持続(±長期)」、「性状(±可変性)」、「結果の状態」、「繰り返し」、「経歴・経験」、「状態の変化」の8種類に分類し、どの用法の習得がより容易であるかを調査したのが、許(1997, 2000, 2002, 2005)である。それによると、(a)学習環境の違いは「テイル」の習得に影響を与えるが(許1997)、(b)学習者の母語は習得に影響せず(許2000)、また(c)「テイタ」の各用法の習得順序も基本的に「テイル」と同じであるという(許2002)。同様の調査は菅谷(2004)によっても行われているが、各用法の習得難易度はやはり許(1997, 2000)と一致するものであった。

これらの研究結果をまとめると、次のようになる。

- (4) a. テイルの「結果の状態」の用法は「動作の持続」の用法より習得が困難である。(黒野1995, 許1997, 2000, 2005, 菅谷2003, 小山2004)
- b. 母語の異なる学習者の間に普遍的な習得順序がある。(黒野1995, 許2000, 小山2004)
- c. 学習者の母語は習得の順序にまで影響しないが、習得の速度には影響を与える。(小山2004)

4.2 現象の説明

現象の説明に用いた理論の観点から見ると、記述のみの研究と、「Aspect仮説」を検証した研究及びプロトタイプ理論を用いた研究の3種類に分けられる。具体的に、早期Aspectの習得研究は記述のみの研究が多く(黒野1995, 許1997)、語彙的Aspectの観点からの研究はいずれも「Aspect仮説」を検証した研究であり、文法的Aspectの観点からの研究は、殆どがプロトタイプ理論によって説明がなされている。

プロトタイプ理論とは、許(2000)によると、Rosch(1973)によって導入された認知心理学の理論であり、あるカテゴリーを構成する項目の中で中心になるもの(good members)と副次的なもの(marginal members)を連続した尺度の上(gradient)に配置し、中心になるものから典型概念が形成されるとする説である。これを第二言語習得の分野に応用すると、あるカテゴリーの習得は典型的なものから始まり、徐々に周辺へと拡張されていくと説明することができる。例えば、「テイル」の習得の場合、各用法が「テイル」の意味をどの程度典型的に表すかによってその用法のプロトタイプ性が決まり、プロトタイプ性の高いものから低いものへと順に習得が進んでいくということになる。

許(2000)は、この「テイル」のプロトタイプを「現在性」、「持続性」、「運動性」という3つの要素によって説明し、より多くの要素を含んだ用法ほど習得が早いという仮説を立てた。具体的に言えば、3つの要素が全て揃ってい

る「運動の持続」は最も習得が早く、「似ている」や「太っている」などの「性状（一可変性）」は運動性を欠いているため習得がやや遅れ、3つの要素全てが欠けている「経歴・経験」はプロトタイプ性が最も低く、習得も最も困難であるといった具合である。そして、学習者の発話コーパスを分析した結果は、仮説によって予想したとおりのものであった。

一方、「アスペクト仮説」を検証した研究についてもプロトタイプ理論によって説明できる。Shiraiは許よりも前にプロトタイプ理論を使ってアスペクトの習得順序を説明している(Andersen & Shirai 1994, Shirai 1993, Shirai & Andersen 1995)。つまり、Shiraiは幼児の発話データ詳細に分析し、幼児は動詞に内在化された語彙的アスペクトを言語化するために、『1対1の原理』(The One to one principle)^{vi}に沿って動詞とアスペクトマーカを結び付けているという仮説を立てた。具体的にいうと、幼児は一方で活動動詞の持つ「+動性」と「-瞬間性」(すなわち、持続性)を言語化する手段として継続相を表すマーカを最初に習得し、他方で到達・達成動詞の持つ「+有界性」を言語化する手段として完成相を表すマーカを習得するということである。実際、この説に従えば、日本語の「テイル」で「動作の持続」より「結果の状態」の方が習得が遅れるのも、「テイル」と結びついて「結果の状態」を表すのは瞬間動詞であり、現実世界の出来事も既に完了しているため、動的で持続的な状態を表すマーカよりも瞬間的で終点のある状態を表すマーカが選択されるためであると説明することができる。これは黒野(1995)の「学習者は『結果の状態』を習得する前段階として『テイル』の代わりに『タ』を使用する時期がある」という指摘とも合致するものである。

4.3 研究方法とデータの種類の

先行研究を研究方法とデータの種類の観点から見てみると(表3参照)、用いられた研究方法としては、縦断的手法と横断的手法がある。しかし、縦断調査に比べてデータを集めやすいためか、横断的手法を用いたものが多く見られる。また、データは多肢選択式の文法テストによって収集されているものが多く(黒野1995, Shirai & Kurono 1998, 三村1999, 許1997, 2002, 小山2004など)、他には産出發話やインタビューを用いたものもある。産出發話には、許(1997)、Shirai & Kurono(1998)のように、絵を見せてそれを描写させるオーラルプロダクションテストを用いているものや、Shibata(1999)のように物語絵を用いてストーリーテリングの方法によるものなどがある。インタビューによるものは許(2000)のようにコーパスデータ(KYコーパス)を用いている研究や、菅谷(2003, 2004)

のように、日記を書かせた後実施したインタビューを行ったものがある。

さらに、被験者の内訳を見てみると、Shibata(1999)の4名がもっとも少なく、次いで黒野(1995)、Shirai & Kurono(1998)の17名、許(1997)の60名、小山(2004)の75名、許(2002)の116名、三村(1999)の121名と続く。ただ、学習者の母語や日本語のレベル、学習環境などはまちまちであり、例えば黒野(1995)では日本で日本語を学ぶ初級学習者(母語は様々)を対象に、来日3ヵ月後、6ヵ月後、9ヵ月後の3回同じテストを実施するという、縦断調査と横断調査を掛け合わせた調査を行っている。また、許(1997, 2002)では日本と台湾という異なった学習環境で学ぶ中・上級学習者を対象に調査を行い、小山(2004)では中国語、韓国語、それ以外の他言語という3つの母語話者グループを、初級後半、中級前半、中級後半の3グループに分けて調査を行っている。また、三村(1999)では韓国語母語話者が9割、中国語その他母語話者1割を占める計121名の学習者を初級、中級、上級の3グループに分けて調査を行っている。

5. 成人日本語学習者によるアスペクトの習得研究の考察と今後の研究の方向性

これまでの成人日本語学習者によるアスペクトの習得研究の結果を見ると、語彙的な観点からの研究では、「活動動詞」は「テイー」、「到達動詞」は「タ」と結びつきやすい、文法的観点からの研究では、「動作の持続」より「結果の状態」の方が習得が困難であると一致した結果が得られている。

しかし、これらの研究はほとんどが現在時制における「テイル」の習得に焦点を当てている。結果について、許(2000, 2002)は「現在性」「持続性」「運動性」の3つの「テイル」のプロトタイプの意味を用い、この3つの意味を全て備えた動作の持続と比べ、「運動性」が欠けた結果の状態は、習得がより困難であるとしている。また、「過去時制」における「テイタ」についても、「現在性」が欠けるため、現在時制よりも習得が遅れるという説明をしている。この説に従えば、同じく「現在性」が欠落している未来時制の「テイル」は習得の難易度が過去時制と変わらないはずである。また、語彙的アスペクトの観点からの「動詞とマーカの結びつき」という「アスペクト仮説」の説明によると、現在・過去・未来時制いずれも「活動動詞+テイー」となっており、習得の難易度は時制に関係ないはずである。しかし、文法テストを使った小山(1999)の調査では、「動作の持続」の正答率は現在時制で89.7%、過去時制で65.3%、未来時制で39.1%であった(表4参照)。同じ「非過去」の

表3 成人日本語学習者によるアスペクト習得研究のまとめ

研究	研究対象	分類の基準			主な結果
		アスペクト	説明に用いた理論	研究方法・データの種類	
Shibata (1999)	英語 JFL ^{vi} 4名 JNS ^{vii} 4名	語彙	アスペクト 仮説	横断 発話(ストーリーテリング)	テイルの使用数: 異なり数で、活動動詞<到達動詞のべ数で、活動動詞>到達動詞
Shirai & Kurono (1998)	1:中国語 JSL 3名 2:中国語・ベンガル語 JSL 様々計 17名	語彙	アスペクト 仮説	1:横断 産出發話 2:横断×縦断 文法テスト	1:到達動詞は「タ」と、活動動詞は「テ イ」と結びつきやすい。 2:到達動詞は「テイ」と結びつきに くい。
黒野 (1995)	中国語・ベンガル語 JSL 様々計17名	文法	—	横断×縦断 文法テスト	「動作の持続」は「結果の状態」より習 得が早い
許 (1997)	中国語 JSL/ JFL 各30名計60名	文法	—	横断 産出發話・文法 テスト	テイルの各用法における習得の難易度を 明示
許 (2000)	中国語・韓国語・英 語計90名 (JSL/JFL 不明)	文法	プロトタイ プ理論	横断 インタビュー	テイルの各用法における習得難易度の普 遍性を明示
許 (2002)	中国語 JSL49名 JFL67名	文法	プロトタイ プ理論	横断 文法テスト	テイタの各用法における習得の難易度を 明示
小山 (2004)	中国語・韓国語・そ の他 JSL 計75名	語彙	アスペクト 仮説	横断 文法テスト	(1)「動作の持続」は「結果の状態」より 習得が早い。(2)テイルは活動動詞、タは 到達動詞と結びつきやすい。
菅谷 (2003)	テルグ語・ロシア語 JSL 計2名	文法	—	縦断 日記+インタ ビュー	(1)母語に進行形のある学習者:「結果の 状態」より「動作の持続」の方が正用率 が高く、出現も早かった。(2)母語に進行 形のない学習者:2つの用法に差がない。
菅谷 (2004)	マラティ語・テルグ 語 JSL 計2名	文法	—	縦断 日記+インタ ビュー	基本的に許 (1997) と一致している。
三村 (1999)	韓国語・中国語など JSL 計121名	語彙	アスペクト 仮説	横断 文法テスト	「パーフェクト」の用法においても、テ イルは活動動詞、タは到達動詞に結びつ きやすい。

用法として現在時制と同じ「テイル」を使う未来時制の方が、「テイタ」という別の形式を使う過去時制よりも習得が困難なのはなぜかについては、明らかにこれまでの研究によって説明できるとは思われない。そのため、今後、アスペクトの習得研究では現在時制における「テイル」のみならず、未来時制の「テイル」、過去時制の「テイタ」といったテンスとの関わりでより多角的に論じる説明が必要となっていると考えられる。

また、これまでの成人日本語学習者によるアスペクト習得研究にはほぼ一致した結果が得られているが、学習者のL1や学習環境がアスペクトの習得に影響を与えることも明らかになっている。しかし、L1の影響を調査したものは

菅谷 (2003) しか見当たらず、被験者数が2名となっているため、一般化することが難しいと考えられる。L1がアス

表4 3つの時制における「動作の持続」の用法

時制	形式	プロトタイプ理論	動詞とマーカ―の結びつき	Koyama (1999)
現在	テイル	+持続 +運動 +現在	活動動詞+テイ	89.7%
過去	テイタ	+持続 +運動	活動動詞+テイ	65.3%
未来	テイル	+持続 +運動	活動動詞+テイ	39.1%

ベクトルの習得過程においてどのように影響を与えるかを調査するために、今後、被験者数を増やし、テルグ語・ロシア語以外に進行形あり・なしの対立した言語を対象に調査することが必要であると考えられる。

さらに、学習環境の違いがアスペクトの習得への影響について調査したのは許 (1997, 2002) しか見当たらず、学習環境がアスペクトの習得に影響を与えるという結果が明らかになっているが、被験者は中国語学習者のみとなっている。今後学習環境の影響を明らかにするためには、他の母語話者を対象とする研究が必要であると考えられる。

注

- i 訳語は白井 (1998) に従った。
- ii 例えば、日本語の「優れている」は英語では「excellent」となり、形容詞である。もちろん、常に形容詞が対応するわけではなく、「彼は高い鼻をしている」は英語では「He has a long nose.」となり、動詞に対応する。
- iii 訳語は白井 (1998) に従った。
- iv 日本語訳は小山 (2004) による。
- v 許 (2002, 2005) では「経歴・経験」を「運動効力」と呼んでいる。また「テイタ」の習得研究では、「テイタ」独特の用法として「直前までの持続」を加え、9種類に分類している(許2002)。また、「テイル」の「状態の変化」は「テイタ」になると、変化の過程を問題とせず、その変化が一定の段階まで達した後の状態を表す(許2002: 43) ため、「テイタ」では「状態の変化の結果」としている。
- vi 学習者はひとつの言語形式にひとつの文法的な意味・用法を与えるところから習得を始めるとする Andersen (1984) の仮説で、“Stated simply, the One to One Principle specifies that an IL system should be constructed in such a way that an intended underlying meaning is expressed with one clear invariant surface form (or construction).” と述べている。(英文中の IL は interlanguage)
- vii 日本語を日本以外の国で、外国語として学習する学習者。
- viii 日本語を日本で、第二言語として学習する学習者。

参考文献

- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一阶段」『国語国文』8 pp.51-63 宮城教育大学
- 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断研究」『日本語教育』95号 pp.37-48 日本語教育学会
- 許夏珮 (2000) 「自然発話における日本語学習者による「テイル」の習得研究—OPI データの分析結果から—」『日本語教育』104号 pp.20-29 日本語教育学会
- 許夏珮 (2002) 「日本語学習者によるテイタの習得に関する研究」『日本語教育』115号 pp.14-50 日本語教育学会
- 許夏珮 (2005) 『中国語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」(金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 pp.5-26に再録)
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者におけるテイルの習得について」『日本語教育』87号 pp.153-164 日本語教育学会
- コムリー・バーナード (1998) 『アスペクト』山田小枝 (訳) むぎ書房 (Comrie, B. (1976) Aspect, Cambridge : Cambridge

- University Press.)
- 小山悟 (2004) 「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性—母語の役割と影響を中心に」 小山悟・大友可生子・野原美和子編『言語と教育—日本語を対象として』pp. 415-436 くろしお出版
- 白井恭弘 (1998) 「言語学習とプロトタイプ理論」奥田詳子編『ボーダレス時代の外国語教育』pp.69-108 未来社
- 菅谷奈津恵 (2003) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究—「動作の持続」と「結果の状態」のテイルを中心に」『日本語教育』119号 pp.65-74 日本語教育学会
- 菅谷奈津恵 (2004) 「初級日本語学習者のテイルの習得に関する縦断研究—マラティ語、テルグ語母語話者の場合」『言語文化と日本語教育』27号 pp.170-181 お茶の水女子大学日本語文化学研究会
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語のアスペクトとテンス』秀英出版
- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』II くろしお出版
- 町田健 (1990) 『日本語の時制とアスペクト』アルク
- 三村由美 (1999) 「第2言語としての日本語のパーフェクトの習得」『言語文化と日本語教育』17号 pp.48-59 お茶の水女子大学日本語文化学研究会
- 吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』pp.155-327 むぎ書房

- Andersen, R. W. (1984) The one to one principle of interlanguage construction, *Language Learning*, 34, 77-95.
- Andersen, R. W. & Shirai, Y. (1994) Discourse motivations for some cognitive acquisition principles. *Studies in Second Language Acquisition* 16, 133-156.
- Brown, R. 1973. *A First Language : the Early Stages*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
- Koyama, S. (1999) An Introspective Analysis on the Acquisition of Tense and Aspect in Japanese as a Second Language, 12th World Congress of Applied Linguistics Tokyo
- Rosch, R. (1973) On the internal structure of perceptual and semantic categories, In T. E. Moore (Eds.), *Cognitive development and the acquisition of language*, 111-144. NY : Academic Press
- Shibata, M. (1999) The use of tense-aspect morphology in L2 discourse narratives, *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 2, 68-102.
- Shirai, Y. (1993) Inherent aspect and the acquisition of tense / aspect morphology in Japanese. In H. Nakajima & Y. O-tsu (Eds.) *Argument structure : Its syntax and acquisition*, 185-211. Tokyo : Kaitakusha.
- Shirai, Y. & Andersen, R. W. (1995) The acquisition of tense-aspect morphology : A prototype account. *Language* 71, 743-762.
- Shirai, Y. & Kurono, A. (1998) The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language, *Language Learning* 48, 245-279.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in philosophy*, Ithaca, NY : Cornell University Press.

An Overview of the Acquisition of the Aspect Morphology in JSL

Yazhen CUI

There has already been quite a lot of research on the L2 acquisition of Japanese aspect morphology in adult language learning. According to the previous research, there is one consistent conclusion which is that in acquiring the Japanese aspect morphology, [resultative meaning] is more difficult to achieve than [progressive meaning]. This paper summarizes and analyzes the acquisition research in Japanese aspect morphology by examining adult learners. The approaching style, methodology, and analyses of the results are closely studied. This study suggests directions for future research.